京都産業大学
ことばの科学研究センター
2024 年度第 1 回研究会

日時：2024 年 5 月 22 日（水）14:00～16:00

場所：4 号館 2 階 総合学術研究所

仏教漢文から見た記紀の交渉

森博達（ことばの科学研究センター員・京都産業大学名誉教授）

書紀の仏典表現はβ群とα群では種類が異なる。β群の仏典表現は古事記にも数多く見つかる。一方、α群の仏典表現は 714 年以後に加筆された箇所に現れるが、これらは古事記ではほぼ見られない。太田善麿は記序の幾つかの用語や用字が書紀の**伊・イ**（巻 1～13・22～23）に偏在することから「**伊・イ**太安万侶参与説」を提唱した。私見では、安万侶は書紀の草稿を見て、712 年に古事記を撰上した。その後、α 群に仏典表現を含む記事が加筆された。かくて古事記には α 群ではなく β 群の仏典表現が用いられることになった。

ノルウェー語の二つの公用書き言葉
言語政策の目的、現状と課題

高峰香織（UiT ノルウエー北極大学工学科学技術学部准教授）

世界には複数の公用語を持つ多言語国家が多くありますが、一つの言語に対し複数の「公用書き言葉」がある国は珍しいと思われます。ノルウエーはその稀有な国であり、公用語ノルウエー語には正書法で確立されたブークモールとニューノシュクという二つの「公用書き言葉」があります。人口約５５０万人の小国ノルウェーにおいて、なぜ二つの公用ノルウエー語書き言葉が定められているのでしょうか。このトークでは、ブークモールとニューノシュクを確立した言語政策を歴史的観点から考察し、現状と課題を概観します。